

## 現在を生きるかつての「日本人」(3) —語りを通して現れた自己の解放—

佐藤貴仁 (亜細亜大学非常勤講師)  
(元・交流協会台北事務所日本語専門家)

### 1. はじめに

現在の研究フィールドである台北市所在の高齢者向けデイケアセンター「玉蘭荘」との出会いは2008年に遡る。きっかけは、当時の勤務先であった交流協会台北事務所日本語センターが発刊していた機関誌「いろは」の編集を担当した際、玉蘭荘の活動を特集記事として取り上げ、取材したことによる。初めて施設を訪問した際に感じたことは、その場にいる会員や施設スタッフが、それぞれの国籍やルーツに関係なく、彼らの共通言語である日本語を介して、皆が生き生きと繋がっている様を目の当たりにしたことで、ことばというもの、人と人とをこんなにもダイナミックに結びつける力があるものなのか、という新鮮で素直な驚きそのものであったことを記憶している。

しかし、このような思いは、おおよその人が施設を訪れた際に、感じるものであるのかもしれない。台湾であるにも関わらず、日本語が飛び交うその空間は、訪問者にとってはあたかも日本にいるかのような錯覚を覚える場所であり、その活気に満ちた雰囲気初めて接することになったのであれば、「新鮮で素直な驚き」はごく自然と湧き上がる感情であると言えるだろう。しかしそれは、単なる表面的な玉蘭荘の雰囲気を捉えた感想に過ぎないものだと、今にしてみれば思う。なぜなら、その裏にある「なぜここに集まっている会員が、戦後を境に日常的に日本語を使用しなくなってから60年以上を経過した現在においてもなお、日本語による活動を求め、玉蘭荘という場にやって来るのか」という施設の存在理由ともいうべき部分にまで、自分の意識が及ぶことが、その時にはなかったからである。

その後、研究調査を目的として2012年3月に

玉蘭荘を再訪し、施設の会員にその人生の語りを聴き始め、関わりを持つようになってから2年余りが経過した。継続的なインタビューを行う中で、彼らが「なぜ日本語による活動を求め、玉蘭荘という場にやって来るのか」というその意味を考えてきたのだが、インタビューを行うにつれ、その意味が自分の中で変化していったことは、実感として確実に持っている。インタビューを始めた当初は、会員たちが、ただ懐かしがって玉蘭荘へ日本語を話しに来たり、日本語を話す人たちとの繋がりを求めたりしているだけでは決してないことは、直感的に感じていたが、「その裏にある何か」が何なのかということは、まったく分かっていなかったように思う。

しかし、何人かの会員に継続してインタビューを行う中で、彼らがその場所に集うそれぞれの意味が、その語りを通して何となく見えてきたことも、また実感としてある。自分の中で、おぼろげであったものが輪郭を帯び、徐々にその姿形を現し始めるという変化を感じるに伴い、インタビュー対象者と私との関係性も、少しずつ変化していった。その具体的な変化とは、インタビューにおける「聴き手」と「語り手」という関係性が、対話を続ける中で徐々に希薄となり、より対等に近い立場で、互いを認識するようになったことではないかと感じている。それは、インタビューとは一方的に話を聴き、相手がそれにただ答えるという形式的な行為ではなく、その場の2人が共に作り上げる相互的なものだという、回を重ねるごとに得た実感によって支えられている思いでもある。

そのような実感を得たことで、私はインタビューにおける「聴き手」と「語り手」という立

場自体は不変である一方、その関係性においては、常に一定であるとは限らないということを読んだ。実際にインタビューを始めた当初は、対等性ということに関して、さして意識が及んでおらず、どちらかという、単に話を聴くだけの「聴き手」として、一方的な感覚で自分自身を捉えていたように思う。だが、インタビューを重ねる中で、その意識が徐々に変化していったのもまた事実である。それは、「聴き語る」という相互行為から互いを知ることにより、両者の距離が近くなったことで、より対等に近い立場に関係性が変化するに至ったからなのかもしれない。あるいは、交流を重ねるにつれ、しだいに信頼が醸成されたことで、関係性がより対等だと思えるようになったからこそ、互いが自己を開示し始めるという変化も起きたと、考えられるだろう。もっとも、どちらの変化が先にあったかということは明解ではないが、ただ、インタビューという行為そのものが、その変化を及ぼした要因であることは確かだと言える。

互いの関係性が変化すること。それは、私自身の意識の変化を意味することでもあり、また、インタビュー対象者の意識を大きく変えたことを意味することでもある。インタビューを通じた私自身の大きな変化に関して言えば、当初持っていた「聴き手」という意識が、時が経つにつれ消失していったことが挙げられる。それは、自分を「聴き手」という立場ではなく、語りを聴く一人の「人」として、自己を認識するようになったこと、また同様に、インタビュー対象者を「語り手」という立場ではなく、一人の「人」と捉える視点を手に入れたからなのかもしれない。こうした変化は、その人生の語りを聴くことで、「インタビューの対象者」としてではなく、「生身の人間」としての彼らと向き合うことになったこと、ひいてはそれが彼らを見つめる自分自身とも向き合うという行為に繋がったことで得た実感から、生まれたもの

だと言えるだろう。

だが、私の変化もさることながら、継続的にインタビューを行った玉蘭荘の会員の中においても、その過程で非常に顕著な変化を辿った者もいる。それがどのようなものかという、インタビューを通して継続的に語ることにより徐々に解放され、明るく深淵となっていくという、ある個人の身に起きた「自己の変容」とも言うべきものであった。その人とは、2008年の機関誌の取材時にも話を聴き、かつ、今を遡ること2年前からこれまでに4回のインタビューを行った李さんという台湾人男性である。本稿では彼の事例を取り上げ、語りを通じた李さんのこの2年間の変化から、インタビューを通してある人の人生の物語に



「24周年慈善音楽会での会員のコーラス」



「アコーディオン&ビオラ（賛美歌を楽しむ）」

耳を傾け、その姿を見つめることが、本人にとってどのような意味を持つのかということについて、考えてみたいと思う。

## 2. 李さんに対するインタビュー

### 2.1 出会いと再会

李さんとの出会いは、先述機関誌「いろは」の記事執筆のために、2008年10月に玉蘭荘を取材した際に遡る。その時、何人かの会員にインタビューをしたのだが、そのうちの一人が彼であった。その後、発刊された機関誌を手渡しに行った時と、2009年に玉蘭荘で講演をした際にも会っているのだが、2012年に研究調査のために再訪した際、そのことについて言及すると、これら一連の出来事はすべて「忘れまして」と言っていたことから、当時のことは、ほぼ記憶には残っていなかったようであることが分かる。

したがって、再訪時に行った2012年4月のある日の午後に行った第1回目のインタビューの際は、「ほぼ初対面」という雰囲気スタートしたが、私にとってその姿は以前の印象と変わらず、穏やかだがはっきりとした語り口の彼そのものであったと記憶している。しかしその一方で、語っている時の柔和な姿とはまったく印象の異なる彼を、私は同じ日にたまたま目にしていたことも、はっきりと覚えている。インタビューは通常玉蘭荘で行っており、その日も例外ではなかったため、午前の活動や会員の様子なども一通りのことは見ていたのだが、その日の朝に彼を捉えた私の目に映ったのは、机に向い日本語が書かれた印刷物を一心不乱に紙に書き写していた姿だった。本人は写経のごとく、単に日本語を書いていただけなのかもしれない。しかしその姿は、明らかに自分だけの世界に入り込み、他者を寄せつけない雰囲気を醸し出していた。その鬼気迫る様子から、何となくではあるが、私は日本に対する彼の複雑で屈折した思いのようなものを感じ取ってしまい、訳

もなく胸が苦しくなったことを覚えている。また、これはのちに聞いた話であったが、過去には李さんと日本人スタッフとの間に、齟齬によるコンフリクトがあり、それが何年にも渡って尾を引いた、ということもあったそうである。それは小さな誤解から生じたことであったようだが明確な理由はなく、ただ相手が日本人であるというだけで、その思いが非常に複雑な形で表出してしまった例であるかもしれないという。それはどのようなことなのだろうか。

玉蘭荘の会員の多くは、未成年の多感な時期に終戦を迎えたことで、日本統治下における「日本人」としての人生に、突如終止符を打たれた経験を持つ。それは、教師をはじめとした身近な日本人が「ある日突然終戦とともに、パッといなくなっちゃった訳でしょ。帰っちゃった訳でしょ。理解できないでしょ。だから捨てたと思われた、そう思った人も結構いるんです」と、玉蘭荘のスタッフであるAさんが語るように、日本の撤退は終戦によるものだから仕方がないと理性では理解していても、感情的には「捨てられた」体験として、心に残っている人も多いという。よって、日本人に対して複雑な心理を抱いている場合も多々あるということから、同様の経験をしている李さんも、それは例外ではないと考えられるだろう。こうしたことから、インタビュー中には穏やかに話す彼がいる一方で、時として不安定な一面を覗かせる彼がまた存在していることも、その背景を考えれば大いに理解できることだと言える。

### 2.2 一回目のインタビュー

2012年の4月に玉蘭荘を再訪した際に行った初めてのインタビューにおいて、私自身の意識や態度を顧みると、完全に「聴き手」として臨んでいたように思う。よって当時は、「対象からいかにして話を引き出すことができるだろうか」といったことや、「対象からどれだけ聴き出せるだ

ろうか」という考えに支配されていたのかもしれない。当然、李さんに対しても、その存在を完全に「話し手」として捉えていたため、彼のことは「研究対象」として一方的に語ってもらう人としてしか、認識していなかったようにも思う。

一方、李さんは穏やかだがはっきりとした口調で、インタビューに応じていた。初回は40分程度のものであったが、1928年生まれという自身の紹介に始まり、公学校を卒業したこと、海軍特別志願兵の第二期生だったこと、海兵訓練期間中に終戦を迎え出身地に戻ったこと、そこが原住民の多い地域だったことから、戦後も日常的に互いの共通語である日本語を話す機会があったこと、その一方で、戦後社会の言語である中国語の世界には馴染めず挫折感を味わい、寂しい人生を送ってきたこと、自分を犠牲にして子どもの教育に尽力してきたこと、今は孫とも一緒に住んで幸せを感じていることなど、事実関係に加えて自分自身の心情についても、臆することなく話してくれた。実際に私自身も、李さんが思いの外、饒舌だったことに対し、「聴き手」としてある種の手応えを感じていたことは事実である。しかし、2人の関係性という観点から考えると、互いに「ほぼ初対面」であったことには変わりはない、よってそうしたある種のぎこちなさがあったこともあり、我々は「語り手」と「聴き手」という単に立場を表しただけの関係という域から、出ていなかったと思う。実際に現在の立場で、2年前のインタビューの音声を変えて聴いてみると、上手く言葉にすることはできないが、2人の間に漂う空気には、やはり堅さやよそよそしさのようなものがあることが分かる。

### 2.3 李さんの変化の予兆

4月に1回目のインタビューを終えた後、すぐに行った作業は、録音した音声データを文字起こし、トランスクリプト（口述記録）作成したこ

とと、それを印刷したものを本人に郵送し、フィードバックを行ったことである。このフィードバックは、誤字や事実の正誤確認のために行ったものであったが、この行為がのちに当初の意図を超え、大きな意味を持つようになるとは、当時は思いもしなかったことである。

その後、2012年9月にあるシンポジウムが開催されることを知り、そこで李さんのインタビューを元にした考察を発表するためにエントリーをした。李さんについて何か書いた場合には、すでに送っていたトランスクリプト同様、本人に内容を確認してもらうようにしていたが、その都度印刷し、郵送するのは手間がかかるということで、先述の玉蘭荘スタッフであるAさんの配慮により、李さんにも許可を得て、電子データで原稿などを送ることになった。ちなみに、このAさんは1996年に李さんが玉蘭荘に通所するようになった当時からスタッフとして関わっている人であり、施設における彼の様子をつぶさに見てきた人でもある。

このようにして、Aさんに協力を得てやり取りを行うようになった中、Eメールでシンポジウムの予稿集を送り、李さんにその内容を確認してもらう機会がさっそくあった。その際の返事をAさんがよこしてくれたのだが、そこに記されていた李さんの様子については、こちらに対する協力的な姿勢が感じられるものであるとともに、彼の変化の予兆を伝えてくれるものでもあった。以下はAさんからのメッセージの一部である。

実は、今日お二人に確認して頂きました。(中略) すぐに読まれ、変更箇所を指摘され、内容はすべて自分が語った通りだと言われていました。僕は政治的なことは一切触れていないので...と、特には問題ない様子でした。

(2012年9月7日付メール)

「お二人」というのは、発表の際の対象者として、李さん以外にもう一人を取り上げたことによるものである。その人はインタビューを元にまとめた文章を読むと、困惑した表情で心配そうな反応を見せたという。それは、自分が語ったことを活字になったものとして、客観的に読んだことで、現れたりアクションであったのかもしれない。なぜなら戦後の戒厳令下において、本音を語ることが極端に恐れられていた時代を過ごしてきたという歴史的経緯から、自分のことを伝え、公表するということが、想像以上に負担が大きいことだということが窺えるからである。だが、李さんの様子を伝える文章からは、それを乗り越える覚悟のようなものを感じ取ることができた。

また、のちに分かったことであるが、自分が玉蘭荘の代表として取り上げられ、かつ、それが活字になったことで、ある種の自信や誇らしさを感じていたということもあったようである。私は李さんにとって、研究のために接近した人間であることに変わりはない。しかし、その語りを文章にまとめたことを通じて、結果的に彼の思いを汲み取ることができていたとすると、李さんはこの時すでに、一人の人間として私を信頼し始めていたのではないだろうか、今にして思う。それを裏付けるかのごとく、シンポジウムで発表した後、間もなく行った2回目のインタビューにおいて、そうしたニュアンスが感じられる場面があったことからそれが窺える。

だがその一方で、私はまだこの時、李さんを一人の人間として見つめる視点は、あまり持っていなかったように思う。それよりも、日本語を使用しなくなった戦後の生活において、「どのように日本語を忘れないようにしていたか」といった具体的な過去の話や、李さんが「日本語での活動にどのような意味を見出しているのか」といった、本人でさえも客観的に語るができないようなことを、どうにか直接聴き出そうと考えているよう

な状態であった。それはつまり、李さんを一人の人間として見つめ、それを受け止めるというよりは、研究を行う者として、彼を「研究対象」として眼差す視点がまざっていたことを意味する。

## 2.4 二回目のインタビュー

李さんは、研究者としてではなく一人の人間として私のことを眼差し、信頼を置き始めてくれているのではないかと思う語りが、2012年9月に行った2回目のインタビューの中に見られた。それは、インタビューの際、たまたま我々の近くにいた施設関係者について語られた場面におけるものだった。よって、李さんの人生の語りを聴くためにインタビューをしていた私にとって、その時のやり取りは本筋から外れたものであり、文字化はしていたものの、取り立てて注目していた箇所ではなかった。しかし、のちに録音したデータを聴き直した際、以下のやり取りがあったことを改めて認識したことで、当時彼が私を、また私が彼をどのように見ていたのかという客観的な気づきを得るきっかけとなった。

—インタビューの途中で、李さんが別の場所にいた玉蘭荘関係者を呼び、挨拶した後の場面

\*：あの方は誰なんですか。

李：私が話しましたでしょう？あの、前回の訪問記ですね。あの方が欲しいと言うたんで。私は何でも返事しません。著作権の問題だから（笑）。あんたの同意がなければ、私はコピーしてあげられないですよ。

\*：はい、はい。

李：あの方が一部欲しいと言うの。

\*：ああ

李：私、話しましたでしょ？先日。

\*：訪問記？

李：前回の// \*：あ、はい// あんた送ってくれた。

\*：はい、はい、はい。

李：で、私、見とったら、あの人が見たんですよ☆

\*：ああ//一部欲しいだとか。

\*：ああ、そうなんですか。じゃ、見ただけ、という  
か見たんですね。

李：はい。ちょっとだけ見せました。

\*：あ、いいえ、いいえ。大丈夫です。

李：ちょっとだけ見て、一部欲しいって。私、あんた  
来たら

\*：ははは、大丈夫です。え、じゃ話は戻りますけ  
ど...

(2012年9月21日、インタビュー第2回目)

上記のやり取りにおいて、李さんが言及している「訪問記」というのは、シンポジウムで発表する前に、その内容を確認してもらうために送った「予稿集」のことである。この予稿集を読んでいた際、施設関係者がそれを目にし、一部分けてほしいと言ったが、私の同意がなければ渡せないということをその人に話した、ということについて語っている。自分のことが載っている原稿を書いた私に対して、「著作権の問題」があるからと言いつつ及んだその語りからは、書き手としての私に敬意を表してくれていることが分かる。そしてその声からは、自分が取り上げられた嬉しさや、私と彼という2人の間だけで行われたことに対する、ある種の秘密を共有している者同士が持つ連帯感のようなものも、何となくではあるが伝わってくるものであった。

しかし、そうしたことにはっきりと気づいたのは、しばらくしてからである。上記のやり取りを見ても分かるように、予稿集の原稿を見た施設関係者が「一部欲しいって」言っていたが、「私、あんた来たら」と私の許可を取らないで、その原稿をコピーして渡すことはしなかったと一生懸命に話す李さんを遮り、「ははは、大丈夫です。え、じゃ話は戻りますけど...」と、話を本筋に戻そうとしていることから、それが窺えるだろう。その

時もやはり私は、李さんをまだ「研究対象」として捉えていたのかもしれない。

そうした私の意識とは裏腹に、Aさんがその後の李さんの様子を伝えてくれた。それは、2回目のインタビューを挟み、李さんが「訪問記」と称した予稿集を論文化することにし、Aさんにその初稿をEメールで送った際にもらった以下の返事（一部抜粋）に記されていた。

今回の事例に、このお二人を選択なさったのは、まさにピッタリだと思います。李さんは、この事を通してかなり解放されたのでは？と感じます。

(2012年10月27日付メール)

### 3. 李さんの変化の意味

#### 3.1 語る力

Aさんは、研究の対象として私が李さんを取り上げたことで、彼が「解放されたのでは」ないかと、2012年の10月の時点でメールに記して送ってくれている。実際に、2012年の9月に行った2回目のインタビュー時において、私自身も1回目よりも明るく快活な印象を持ったことは否めないことであり、またそれは、単なる印象としてではあるが、録音した音声からも伝わってくるものもあった。だが、彼の変化はこれだけではなかった。それは、李さんに予稿集を論文化したものの最終稿を確認してもらった際の様子を、Aさんがメールで伝えてくれた文章（一部抜粋）にも見て取れる。

李さんは、ご確認されて、OKとの事。また、もし佐藤さんに要請されれば、旅行のついでに、皆様の前で自分の正直な気持ちを直接お伝えしてもいいと、おっしゃっておられますよ。

(2013年1月28日付メール)

インタビューにおける自身の語りを通し、語ることでその当事者が変化していくことは、どのようなことを意味するのだろうか。それほど積極的なタイプではなかった李さんが、自分が辿ってきた人生を自らの声で、公の場において話したいと言っているという。そのような考えが及ぶに至った背景には、やはり「語り」の持つ力を意識せざるを得ないだろう。なぜならそれは、彼自身が解放され、明るく快活になっていった要因として、インタビューにおける「語り」があると考えられるからであり、そこに自分を語るということの本質的な意味が隠されているような気がしてならないからである。

一例を挙げると、インタビューという行為自体は、李さんの変化を起こすために行ったものではないが、結果的に現在の視点から過去を語るということが、これまでの自分の人生を捉え直す契機となった可能性がある。また、継続的に語りを聴き、文字に起こしたものを本人に返して見てもらうことは、改めてその内容を客観的に把握することにもなる。さらに、インタビューではあるにせよ、その語りに耳を傾ける「聴き手」という存在自体が、表出された語りを含めた「語り手」そのものを受容する者として、その意味が与えられていると見ることもできるだろう。このように、インタビューにおける「語り手」の語りを中心に取り巻く、相互的で重層的な状況がプラスに働きかけた結果、解放的で積極的になったという彼の心理的な変容に、影響を及ぼすようになったのではないだろうか。

その人の記憶をその人自身が語るることについては、ナラティブ・セラピーという心理学的療法としても、その有効性が認められている。このナラティブ・セラピーは社会構成主義をもとにした概念の一つで、自身の記憶を自由に語り、その主観的世界を新たな物語として語り手が構築する行為を通し、過去のある出来事を捉え直すことで、そ

れが語り手の心理に有効に働くという理論に基づいたものである。つまりそれは、一般的に存在していると考えられている「普遍的真理、客観的事実、絶対的価値」ではなく、自身が捉えた自分だけの「個別的真理、主観的事実、相対的価値」を自らの言葉で編んでいくことを意味する。その結果、ある経験を自らの解釈で捉えることにより、固有の意味や価値を見出すことで、問題となっている過去の出来事を乗り越える作用が働くとされているが、これは李さんが辿った変化にも、重なる部分があるのではないか。それは、自分の過去を語ることで、いわば心の傷のようであったものが癒され、結果的にそれを乗り越える手立てになったと捉えるものの見方である。

戦後、台湾において社会の言語が日本語から中国語に切り替わった中で、これまで普通に日本語を使用してきた自分は何一つ変わっていないにも関わらず、取り巻く世界が大きく変化してしまったこと。その現実の中で、何か取り残されたような感覚から自身の存在意義が見出せなく、挫折感を味わったまま、毎日をただ過ごす日々が続いたこと。このようなある種の失望感を伴う経験を自らが語ったことで、これまで封じ込めてきた自分の過去の一部を手放すことができたのかもしれないと考えれば、インタビューや論文化にまつわる一連のやり取りが、図らずも李さんにナラティブ・セラピー的な影響を及ぼしていたと考えられるだろう。

### 3.2 誰かの人生に耳を傾けることとは

自分ではなかなか気づけなかった李さんならびに私自身の変容は、Aさんとのやり取りにおいて、意識化していったことも大きい。既述の李さんの変化に接するにつれ、何となくではあるが、私は自分がしていることが単なるインタビューに留まるものではないと思い始めていた。そして、「皆様の前で自分の正直な気持ちを直接お伝えし

てもいい」と話した李さんのその後の様子について記されていた A さんからの以下の返信を読んで、その思いを確かにした。

先週、李さんは、ただ正直な気持ちをお伝えしたと言われていました。佐藤さんを信頼されておられることを強く感じました。(中略) 実は、佐藤さんがこの論文で関わって下さってから、李さんはかなり変わってこられた様に感じております。心が解放され明るくなられ、益々お元気になってこられました。是非、日本行きを実現して差し上げて頂きたいです。彼のためにもプラスになると思いますので。

(2013年2月5日付メール)

これを読んで、私は誰かの人生に耳を傾けることが単なる「聴き取り」ではなく、その語りを聴き、人生の物語を共有することで、その人自身を受け止めることに繋がっているのではないかという思いを得た。そうした行為そのものが、語り手の心の解放を促す一つの要因にもなっていたのではないかと思うのである。確かにそれは、研究を通じた相互行為であることに変わりがない。しかし、インタビューを通して対象と向き合うことで、「聴き手」と「語り手」という立場を超えた、より対等に近い関係性が構築されたのではないかと感

じている。それは、インタビューとは一方的に話を聴き、相手がそれにただ答えるという私自身が当初持っていた構えが変化したことをも意味する。また、インタビューとは形式的な行為ではなく、より対等な立場で、その場の2人が共に作り上げる相互的なものだという認識も新たにされた。これらのことは、後から振り返って分かったことではあるが、李さんが一人の人間として、私を信頼してくれるようになったことや私がしばらく持っていた彼を「調査対象」として捉える視点が消えていったことは、相互行為によるものと言えるだろう。つまり、インタビューにおける「聴き手」と「語り手」の関係性の構築は、調査を円滑に行うために、より対等な立場を形成するという「目的」としてあるのではなく、互いが作り上げた「結果」なのである。

また、上記のメールに記されている「日本行き」というのは、その前に話に上った、日本へ行って「皆様の前で自分の正直な気持ちを直接お伝えしてもいい」という彼の気持ちを汲み取ったものである。結局、高齢である李さんが、一人で日本へ旅行することは家族の心配などもあり、実現することは難しくなってしまった。だが、その代わりという意味もあったのかもしれないが、李さんが自分でコースを考え、生まれ故郷の街に招待して



説明をする李さん



林業における材木運搬の様子(当時の復元)



くれたのである。出発からずっとつきそい、幼少期に生活していた場所や戦後に解隊し、帰還してから従事していた地場産業である林業が説明された資料館などを自ら案内してくれたのだった。それは、本当に心のこもったもてなしであることが身にしみて感じられるものであった。また同時にそれが、これまでの私との関係における彼の気持ちの表れなのだろうと感じさせてくれるものでもあった。

#### 4. 研究活動を通じた互いの在り方

インタビューを通して自己を語ることで、李さんが明るく解放的になり、ますます元気になってきたというメールを受けた後、私は実際に A さんに会い、そのことについてのインタビューを行っている。自分としては、主にインタビューによる「語り」を通して、李さんの変容が起きていたと解釈していたのだが、これまで私がしてきたことと、李さんの変化を常に見守ってきた A さんからは、また別の視点から話を聴くことができた。

私の方の立場からすれば、あの方たちの思いをこうして、日本の方が汲み取って、しっかり文字にして、そして「こうですか」「ああですか」って言ってね、きちんと対応してくれるということが大きいと思います。だって、今まで来た人、誰もそれやってくれた方いらっしやらないから。面談は受けてもね、ほとんどまったく関係ないですよ。まあもちろん、ここまで丁寧にやっていただかなかったとしてもね、そういう部分が全然、受けたことないんですよ。

(2013年9月20日 Aさんインタビュー)

Aさんによると、李さんの変化の要因として考えられることは、インタビューを通して語ったことだけではなく、むしろその後にトランスクリプトを作成して本人に送ったり、送付した後に実際

に会って、その訂正箇所を一緒に確認したりしたことが大きいのではないかという。既述の通り、台湾に存在しているにも関わらず、玉蘭荘における共通言語は日本語であり、活動はほぼすべて日本語により運営されている。このような特質を持つ施設の特異性からか、玉蘭荘を扱った論考も多数発表されている。また、会員に対する調査やインタビューも多く受け入れているというが、これまでに受け入れた人たちの中で、調査の協力をした会員に対して、文字化した資料を見せて確認した人というのはほとんどいなかった。またそれは、論文などを記した場合も同様であるという。

だから大きないい機会だったとは思いますがね。文字にして返してあげたり、こうしてきちんとやってくださることはね、今まではただ話したのを聴いて、何も返してもらってないし、そういう人いなかったんですから。ほとんどの学者とか色んな人はね、自分ではもちろんそれで何かいい論文書いたかどうか知りませんが、私はね、現実的に生きている人やその人たちに、それがフィードバックされないとか、意味ないっていうか、あんまり残念に思うんですよ。今まで色々な調査とかあったけど、私、いつでもそういうことを受ける側で申し上げるのは、先生方がいい論文書かれて、それを参考になさる方たちが、色々活かされるのは、それはまた結構なことなんだけど、今、それに応じた方たちにも、ある程度フィードバックしてもらわないと。そこら辺が足りない部分として、今まで多々あったということをお私、申し上げていたんですけど、ここだと余計それがね、軽んじられているというか、何か利用されてるとしか取れなくて、私、いつでも協力してあげてくださいって [会員に対して] 言うのも、ちょっと憚っちゃうようなこともあるんです。申し訳ないなあと、日本人として。だからこそ、余計強調して、踏みにじらないでいただきたい、という風に思ったりするんですよ。で、この方たちは、このことをす

ることによって、自分もメリットがあったり、自分にとっても凄くね、振り返りの学習になったとか、非常にこう、はっきりと人生の今までを捉えられたりっていうことがあったら、凄い立派な博士論文書くのも凄く大切なことだけど、もっと大きいかって私は思ってます。命ってとても大切なことだから、一人ひとりの。

(2013年9月20日Aさんインタビュー)

この話を聴いて、研究を通した自分の変容について思いを巡らせた。当初はその相手を「研究対象」として捉え、どのように話を聴こうかと考えていた私を、李さんが一人の人間として受け入れてくれ始めたかもしれないという変化を感じ、そこから私の意識も変化していったように思う。それは、「研究対象」は決して研究だけのために存在している訳ではなく、また、こちらが必要なことをただ語ってもらうだけの存在でもないということである。他人である研究者にわざわざ語らなくてもいいことを聴かれ、聴いたらそれっきりという状態はあまりにも寂しく残念であると言わざるを得ないだろう。人を相手にする研究であればなおのこと、その人に対して一人の人として敬意を払い、誠意を尽くさなければならない。それは李さんの変化から、私が教えられたことでもある。また、それを受けて、誠意を持って彼に接することが、李さんのさらなる自己の解放の一助になっ

たのであれば、それは非常に嬉しいことでもある。

戦前は「日本人」として日本語で教育を受け、生活をしていた彼らは、終戦を機にそれまでの世界が大きく変わってしまった経験を持っている。しかし、そのことは戦後社会によって封印させられ、長い間、彼らの過去やその存在自体も公に認められることはなかった。その語りを聴くことで、心の奥に押し込んできた感情を手放すことができれば、それが結果的に自己の解放へと繋がるのだろう。だが、それ以上に大切なことは、彼らを数奇な運命を辿った歴史の生き証人として扱うのではなく、一人の人間としてそのような声に耳を傾け、その内容を受け止め、彼らの人生を肯定し、共有することなのではないだろうか。語りを受け止めることはもちろん、その内容を語ったその人自身を、誠意を持って受け止めることは確かに難しい。しかし、私はその部分を大切にしていきたい。なぜならそれが、研究者である前に、人として大切にしなければならないことだと思うからである。

#### 【記述の説明】

本文中における文字化資料内の「\*」はインタビューである筆者を表し「☆」はインタビューとインタビューの発話の重複部分を示している。

#### 【参考文献】

高橋規子・吉川悟(2001)『ナラティブ・セラピー入門』 金剛出版